



ルーテル

藤が丘だより

発行 月報委員会

発行日 2022年6月5日

№. 97

神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。
あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、
神の子とする霊を受けたのです。

ローマの信徒への手紙 8章14-15節



礼拝献花より

御言葉に生きる

実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。

ローマの信徒への手紙 10章17節

ルーター派キリスト教会 日本福音ルーテル藤が丘教会 牧師 佐藤和宏
〒227-0043 横浜市青葉区藤が丘 2-31-21 tel 045-973-2729/ fax 045-439-7009
URL:<https://www.jelc-fujigaoka.org/> mailto: fujigaoka@jelc.or.jp



シリーズ説教

『隣人の間で』

牧師 佐藤和宏

ルカ24章44～53節

「主イエスの宣教」が、使徒たちの宣教を経て、今を生きる私たち教会の宣教と結びついている。この事実、私たちに恐れをもたらしすかもしれません。私たちは注意深く、御言葉に耳を傾けなければならぬでしょう。聖書を通して主なる神が私たちに告げられていることは、「〜になりなさい」という命令である以上に、「〜である」という宣言である場合が多いからです。私たちが命令に応えて、そのようになつていくのではなく、主の言葉のゆえにすでにそのようにされているということなのです。例えば、今日、第二の朗読でお読みいただいた、エフェソの信徒への手紙で、主なる神がパウロを通して告げているのは、「教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です」ということなのです。あくまでも「教会はキリストの体であ

る」と言われているのであって、「キリストの体となりなさい」とは言われていないのです。教会が教会であるために、その理想に近づくために、あれをしなければならぬ、これをしなければならぬ。清く正しくなければ・・・と考えるかもしれません。しかし私たちの努力が教会を教会としてふさわしくするかどうかではなく、「すべてを満たしている方が満ちている」この一点に、教会が教会である理由があるということなのです。

一般財団法人日本国際飢餓対策機構が編集した「麦と魚世界で実る主イエスの愛」という小さな本があります。その本の冒頭に「はじめに」という項目があるのですが、著者の神田英輔氏がアツシジのフランチェスコの言葉を紹介して次のように書いています。「平和の祈り」を祈った人としてよく知られているアツシジのフランチェスコは、『いつも福音を宣べ伝えなさい。・・・もし必要ならば言葉を用いて』と語りました。この言葉に出会ったときに、宣教の秘訣を教えられたような気がしました。彼は私たちに、口で宣教する以前に、自分の身体のすべてを用いなさい。

耳を用いなさい。手足を用いなさい。と教えてくれているのです。」

神田氏は、隣人の必要を見極める目、隣人の悲しみの言葉を聞く耳、隣人の必要に應えるために出かけて行く足、隣人の必要のために手を用いること、そして最後に福音を語ることを教えられたと書いています。確かに宣教の歴史をさかのぼり、主イエスにまでたどり着くと、その宣教はもちろん多くを語られました。が、誰が隣人かと頭で考えるより先に、必要としている人の隣人になる

ことを教え、そのように生きられたことを知らされるのです。人々の悲しみを聞き、そして寄り添い、必要に應えて出かけて行かれたのです。その手を用い、人をいやしました立ち上らせたのです。このような主イエスの宣教を思い、この主の宣教が、使徒たちの宣教を経て、今や私たちの宣教に結びつけられていることを考えるなら、私たちも体を用い、目と耳と、手足を用いるように招かれていることを知るのであるのです。

「教会はキリストの体である」とは、こういうことなのではないかと思うのです。このために、主イエス・キ

リストが教会に満ちていると言われているのです。

私たち教会の宣教も、「キリストの体である」ことを常に意識して、行動することが大切だと思います。隣人の必要を見極める目、隣人の悲しみを聞く耳、隣人の必要に應えて出かける足、隣人の必要のために手を用いる。こうして隣人となつていき、寄り添って生きること。このようなキリストの宣教に結びつけられた、宣教を私たちのものとしていきたいのです。

神が、何よりもはじめに主イエスを私たちの間に送り、私たちの隣人としてくださり、私たちの必要を見極め、悲しみに耳を傾け、心に寄り添ってくださいました。そして今や、主イエスは天に昇られたのです。それは「父なる神の御前で、私たちのために執りなしをしてください」ためだと言われています。ですから、私たちも目、耳、足、手を用いて、人々の隣人となって生きるのである。これが「教会がキリストの体である」という意味であり、私たちが神に仕えることであり、私たち教会の宣教にほかならないのです。(主の昇天)

○本(○藤) ○美さんが受洗された時は、コロナ禍で信徒間のお喋りなどの対面交流が制限される状況でしたので、教会の皆さんとの交わりも多くなかったと思います。そうした中で、短い期間でしたが、たまたま親交を持つことができ、楽しくお付き合いさせていただけたことを感謝し、ここで、少しでも彼女のことを皆さんへお伝えできればと思います。

昨年初め頃、ある日の礼拝後、○美さんは教会のオルガンに興味があったようで、その日の奏楽担当者だった私に声をかけて下さいました。お話を聞いたら、ジャズを歌うのが好きで、若いころからレッスン教室にも通っているとのことでした。私もジャズソングが好きなので、それでは、時々教会と一緒に歌いましょう、という話になりました。

また寒い時期の教会でしたが、彼女が体調の良い時にあわせて、毎回2〜3時間ぐらいいっしょに歌ったかと思えます。“Sentimental Journey”、“Fly Me to the Moon”、“My Funny Valentine”…などなど。彼女が伴

奏して、私が歌わせてもらう事が多かったのですが、初めて弾き語りで歌っていたいた時は、本当に素晴らしい歌声で、プロのジャズシンガーのようでした！

明るく、お話し好きな方で、その都度、家族のこと、自分の病気のこと、抗がん剤治療のこと、病院のことな



○本(○藤) ○美さんのこと

山○○子

ど、忌憚なく、淡々と心情を話して下さいました。

コロナ禍でなかったら、教会の方々と、もっともっとお話がしたかったのでは？と思います。

彼女は、名古屋出身で、名古屋は今も親戚や、転勤になって働いている息子さんがいるということでは、

今年3月に名古屋の親類宅から病院付の施設に移られました。一度、施設にお見舞いに行った時には、歩行が少し困難な状態でしたが、面会時間15分のところ、ついついお喋りで2時間ぐらいいっしょに、慌てて席を立ちました。それでも、別れ際には、「また来てね！」と言ってくれたのは、体調悪い中での彼女なりの気遣いだったかと思えます。彼女のベッドの上に聖書が開いてあったのが、とても印象に残りました。

その後、2週間ほどして、ホスピスに移り、家族とも面会ができない状況になりました。ただ、彼女からの報告(ライン)では、「その先生のギター訪問があつて、一緒に4曲ぐらいいっしょに、演歌にも初めて挑戦して…音楽は本当にいいですね！」と、いつもどおりの明るいメッセージで、やっと落ち着いたらと安心されたようでした。

彼女は、自分の死期を悟ってから、名古屋の施設、ホスピスの予約、お墓の購入と、神様への道に備えてすべてをご自分で整えていかれました。

た。お墓を小平霊園にしたのは、自分の愛する二人の息子さんたちが『都内にお墓を』と希望されたから、と伺っております。

私はいつも、彼女の人生に対する潔さを感じておりました。藤が丘にいる時は、気丈にされている彼女と楽しく会話をしてきました。ただ、最後にホスピスに移られ、彼女の体調の低下を感じられるようになった時、どうメッセージを送るべきか、だんだん、良い言葉が見つからなくなりました。3、4日間、空いた後に送ったメッセージには返信がなく、翌日、奇しくも私の誕生日に亡くなってしまいました。もう少し早くメッセージを送るべきだった…と後悔が残りました。今ここに、私からのメッセージを送ります。

「○美さん、ジャズソングを一緒に歌ってほんとに楽しかったです、ありがとうございます！ 神さまのもとで、大好きな歌を思いっきり歌ってください。

永遠の安らぎと平安をお祈りいたします。」

納骨の祈り・説教(抜粋)

「生も死も」

牧師 佐藤和宏

○美さんが、初めて教会にお電話をくださったのは、2020年10月中旬のことでした。「洗礼を受けるにはどうしたらよいか？」ということでした。私は「礼拝に来ていただき、聖書の学びを始めましょう」とお答えし、翌週から学びの時間が持たれることになりました。毎週火曜日、午後2時半。これが○美さんとの学びの時間でした。毎回一時間ほどの学びを続けたのですが、お話をすることが好きな○美さんは、学びが終わってから、世間話を楽しそうにされています。「洗礼を受けたという」ということでしたので、12月のクリスマスをご提案したのですが、夏の頃に医師から「余命半年」の宣告を受けられていたそうで、少しでも早い方がいいということになり、11月29日の礼拝で洗礼式をすることにいたしました。一年半前のことになりました。

○美さんからお聞きした話では、

中学生の頃には教会に遊びに行かれていたようでした。もちろん礼拝にはなく、平日、学校が終わってから行っており、教会にいと落ち着く思いがしたと言われていました。また、お子さんが幼稚園に行かれていたとき、いわゆるママ友の一人に、クリスチャンの方がいて、たいへん憧れていたとお話してくださいました。その後も、ルーテル教会の隣にある美容室に行くたびに、行きたくないと思っていたそうで、美容師さんからも「行かれたらどうですか」と言われていたと笑っておられました。そのような話を聞きながら、私は○美さんに、「ずっと神さまにとらえられていたんですね」とお伝えしました。本当にそうだと思います。人は教会に行き始めて、神さまに出会うではありません。もちろん洗礼を受けてからでもないのです。神さまは、それぞれの人生の日々にあつて、人に出会い、人と共におられるのです。

医師から宣告されていた余命を過ぎたとき、○美さんに私は次のように告げました。「これからの日々は、

神さまからのプレゼントですね」と。死を覚悟する中で、教会を訪ね、洗礼を受けられた方ですから、主の約束を信じ、その約束に支えられ、穏やかにその時を迎えられたことでしょう。

ホスピスから病院に移られて、面会が出来ずにいた牧師から、○美さん召天の連絡メールを受けたとき、そこに次のようにありました。「ホスピスから病院に移られて面会ができない状態でしたが、今週、ご本人の強い希望で特別の許可を得て病院にお訪ねすることができ、共に祈り、聖書の言葉を聞き、賛美をする時が与えられました。」

○美さんが最後に望まれたのは、祈ること、聖書の言葉を聞くこと、そして大好きだった歌をうたうことだったと伝わってきました。このことを聞いたとき、○美さんがしっかりと主に結ばれ、幸いとされて、その死を迎えられたと確信したのでした。「今から後、主に結ばれて死ぬ人は幸いである」。この確かな約束のうちに、今から後、○美さんは幸いな者とされて生きるのです。

主日礼拝ライブ配信の回想録

ー心地よさを目指してー

田○○夫

その後、はつきりとした効果の表れるハードとソフトの調整をすることができず、視聴くださる皆さんには何か月にも渡り聴きにくい音声を提供し続けることはとても心苦しかったのですが、何とか踏ん張って経験を重ねてゆくうちにパソコンや配信機器や音声機器といったハード面の取り扱いは慣れていったのです。がしかし、配信ソフトとの微妙な調整がどうしても上手く行かず、時として礼拝音声途中で殆ど聴こえなくなってしまうという大失態も発生させてしまいました。藁にもすがる思いで再度音楽事務所の配信担当をしている知り合いに厚かましいとは思いつつアドバイスを求めたのですが、彼もきつと嫌気が差したのでしよう、話の最後に「教会の環境がわからないので何ともしようがないな・・・」と言って、電話を切ってしまいました。

(最終ページに続く)

●田哲○さんより

役員三年目にもなるのに、少しでもお役に立たちたいと思えば思うほど、いろいろと気が散ってしまいうことが多いのを実情で、礼拝に没頭できた昔が恋しくなります。でも、礼拝中の言葉によって満たされて帰宅する時も、礼拝中に心そこにあらずであつたために心空しく帰宅する時も、等しく主なる神の恵みのうちにあるように感じるようになってきました。

話は変わりますが、最近、こんな怖い夢を頻繁に見るようになってきました。被害届を司法当局へ提出したら、当局が加害者とマスコミと一緒に連れてきて、私の尋問を始めます。そして、滅茶苦茶な理屈と捏造された証拠をもって私こそが加害者であると断定し、待っていましたとばかりマスコミは一斉に誇張した歪曲報道を始めるのです。私はその理不尽さに対して義憤に燃えたところで眼が覚める、というものです。

これは、この二年間に世界で起

きた三つの大事件が私に引き起こした、一種の心の病かもしれません。

私が白昼夢を見て、どちらが現実で、どちらが仮想現実か迷っているためかもしれません。そんなこともあつて、そろそろフルタイムの勤務から身を引いて閉じ籠るか、どこかへ転進する潮時かなと感じるように



なつてきました。バツハと古いジャズを聴きながら、面倒くさい古典を読むことは、相変わらず最高の喜びです。このような近況ですが、間違いや迷いや決断に際していつも主なる神が共にいてくださると確信できること、教会のみなさまと祈りで支え合っていると感ずること、それら

が、私に与えられた最高の恵みなのだと思えます。

●田○夫さんより

2022年度の役員を務めさせていただきます。1年間よろしくお願ひいたします。

コロナ感染に対する規制が緩和され、今まであつた細かな制限がなくなりつつありますが、まだまだ油断のできない状況であると感じています。しかし、この約2年に及ぶ、グループ制とは言え皆さんと一緒に主日礼拝を毎週守ることができたこと、またライブ配信においてはトラブルもなく順調に進んでいることは、喜びであると同時に感謝の月日でもあつたように思います。今後も微力ではありますが、教会活動を、皆さんと力を合わせて少しずつ進めて行ければと願っています。

昭和40年代半ばは、いろんな意味で社会の転換期だったように思います。その一つに、黒い煙を吐いて生き物のように喘ぎながら沢山の山々や重い荷物を牽引していた蒸気機関車(S)が、効率の良い電気機関車やディーゼル機関車に置き換え

られ、姿を消してゆきました。そんな移り変わりの時代の中で、一生懸命に働く姿に魅了された私は(中学生、高校生時代)蒸気機関車の虜になり、今で言う鉄道オタクとして少ないお小遣いを溜めては、休日に日帰りできる地方路線のS写真撮影に出掛ける青年でした。時には、授業を早退して撮影に出掛けたりしました。しかし、高校卒業を期にその熱き想いを封印し、その後の人生を歩んできました。

コロナ感染症によって自由な時間を与えられた今、その気持ちを解き放し、以前からの趣味でもありました低山ハイキングと共にS(鉄道)ファンとしての熱き想いを復活させ、この2つの視点から神様を讃美する日々を過ごせたらと願っています。

平和への祈りと共に。



V) 目処がつく(2021～現在)

一進一退を繰り返すそんな状況の中でメディア委員の皆さんたちは諦めずに、さらによりよい配信の為にコツコツと努力をしてくださっていました。①配信手順を間違えずにきちつと安定して出来るようにと、詳細なマニュアルを作成してくださったり②オルガンの音や音声安定するようにと、小さなミキサーにワイヤレス受信機を直接接続をして雑音が入らないように設備改善をしてくださったり③不安定な配信環境を安定したものとするために、

ルーターと直接結ぶLANケーブルを2階から礼拝堂に配線してくださったりと、それぞれがそれぞれの持てる力でもって改善のために対処してくださっていたのです。

それらの努力は暗闇の中に一筋の希望の光を照らし始め、視聴して下さっている方々から「先週は良かったわよ」とのお褒めのお言葉を頂くようになり、「本当によかった！」と胸を撫で下ろすと共に子どものように嬉しくなってスキップをしながら家路に着くことも度々でした。(続く)

第2回アンケート 集計結果より①

第2回アンケートについて、皆さんのご協力に感謝します。集計が進み、皆さんの声を集めての、宣教40年宣教計画へとつなげたいと願っています。今後、役員会での確認を経て、ご報告出来るように整えたいと思っておりますので、今しばらくお待ちください。それまでの間、紙面を使って簡単に触れてまいりましょう。今回は「教会の良いと思われる点」についての質問に關してです。

第1回アンケートでは「信徒の交わり」が22の回答があり、第2回アンケートではいただいた声から「交わり」「雰囲気」「配慮」と選択肢を留意しましたところ、合わせて65のご回答をいただきました。藤が丘教会の良い点として、圧倒的な支持と受け止められます。また「礼拝」について第1回では回答が9でしたが、第2回では21と、大きく増えている点に注目できるでしょう。

このアンケートは「デルファイ法」といって、意思決定の一つの手法ですが、広く声を集め、またそれぞれ

の声を皆さんで評価(第2回アンケート)し、選り取っていくこととなります。皆さんの声を集めて、一緒に決めていくという点で、非常に優れていると思われれます。

皆さんの声を集めて、来年の宣教40年の計画づくりに活かせる、他の教会にも良い例となるのではないかと思います。(佐藤)

■牧師室より

聖霊降臨(ペンテコステ:ギリシャ語で『第50』の意)は、イースターやクリスマスと共に、キリスト教会の三大祝祭日とされます。また、聖霊を受けた使徒たちが、宣教を開始した(使徒言行録2章)ことから、「教会の誕生日」とも言われます。ところが、イースターやクリスマスが二大祝祭日であるかのように見なされているように感じます。

聖霊を受け、「霊」が語らせるまに語る。人が霊を受けて生きる者となった(創世記2章)ように、私たちも聖霊を受けて生きるのです。「聖霊降臨」について、考えてみてはいかがでしょうか。(佐藤)

今月の受洗記念日の皆さん

2日 ○山○子姉
3日 田○○子姉、○田喜○兄
6日 田○○夫兄、○本○子姉、武○○子姉

おめでとうございます。



「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。」ローマの信徒への手紙 10章17節
福音伝道会ウェブサイト <http://www.yfj.or.jp/gkwa/>
フェイスブックで礼拝のライブ中継をしています。(有)福音伝道会